彦根城博物館だより 134

Hikone Castle Museum News
2021.9.1

特別展

日本の刀装
―刀を飾る技と美―

2021年
10/23(土)
～
11/23(火・祝)

TNM Image Archives

重要文化財
銀地三鱗紋兵庫鎖太刀拵
（号 北条太刀）
東京国立博物館蔵

兵庫鎖太刀拵は、柄頭から下がる金具と鞘の上方に伸びる帯執に鎖を用いた、豪華で厳めしい姿の拵です。本作は、鎌倉時代に制作されました。鞘の地板をはじめ、鐔や覆輪などに至るまで銀製で、随所に三鱗紋を表し、その部分に鍍金を施しています。

『平家物語』で平家の公達などが戦場で振るっていたと記される「厳物造太刀」は、兵庫鎖太刀と同種の拵とみられており、本作の美しい銀の金具類は、単なる装飾ではなく、激しい戦いの中でも刀身を保護するための強度を保つ役割も担っていたと考えられます。本作は、まさに用と美を兼ね備えた拵と言えるでしょう。

展覧会情報

テーマ展
茶道具の"い・ろ・は"
8月20日 ▼ 9月15日

企画展
奇才の絵師 張月樵
―彦根～京～名古屋への道―
9月18日 ▼ 10月18日

特別展
日本の刀装
―刀を飾る技と美―
10月23日 ▼ 11月23日

テーマ展
井伊家近代文書からみる彦根城
11月27日 ▼ 12月24日

展示案内

2021年 9月～12月

常設展示

“ほんもの”との出会い

―彦根藩井伊家伝来の大名道具を中心に八〇点あまりを展示―

特別展

日本の刀装

―刀を飾る技と美―

会期：10月23日(土)～11月23日(火・祝)

会場：展示室 1～3

主催：彦根城博物館

《芸術文化振興基金助成事業》

刀剣を収める鞘や柄、鐔などの金具類といった外装部分を刀装あるいは拵と呼びます。こうした外装は、刀身を保護しつつ安全に携行すると同時に、実戦の際には滑り止めや手を刃から防護する実用的なものですが、古来、さまざまな素材や技法によって、美しく飾り付けられてきました。

日本の刀装に見られる形式や装飾は、古墳時代に既にその原型が見られ、奈良時代になると後世まで続く太刀拵などの源流と言える拵が確認されるとともに、鞘に漆を塗った塗鞘をはじめ、金や銀、革や鮫皮などを使用した装飾が見られます。以後、日本の刀装は奈良時代以来の拵の様式を踏襲しつつ、展開していきます。特に装飾面は、デザインや技法などの変化に富み、鞘を例に挙げると、黒漆のみを塗ったシンプルな仕上げから裂や金属の薄板を巻いたもの、華やかな蒔絵を施したもの、さらには漆で表面に種々の凹凸を表したり、鮫皮や貝、角、革などと漆塗を組み合わせた変わり塗に至るまで、幅広いバリエーションを見ることができます。殊に桃山時代の作品から多く見られる変わり塗鞘は、江戸時代に大きく花開き、その種類は数百種以上と言われるほどです。

また鞘塗のほか、鐔などの金具も刀装を彩る重要な要素です。室町時代に刀装具を主に制作する金工が現れたことにより、その意匠と装飾技法は多様化していきます。江戸時代には、彫金や色絵などの技術の粋を集めた多彩な作品が、各地で活躍する数多の装剣金工によって生み出されていきました。

本展では、日本の刀装の変遷を、鞘塗を中心とする装飾に焦点を当てて紹介します。館内外から選りすぐった、それぞれの作品に施された種々の装飾と技をご覧ください。

〔写真キャプション〕
タイトル下：野菜四所物のうち目貫 後藤一乗作（江戸時代後期）黒川古文化研究所蔵
本文上段：鉄地鶴丸文透鐔(江戸時代)
本文下段：黒蝋色塗鞘大小拵（江戸時代）
展覧会の構成（左頁上段）：赤銅地藻魚図大小縁頭銘 岩本昆寛(花押)（江戸時代中期）黒川古文化研究所蔵

古代の刀装 ― 源流の拵 ―

金銀錺荘唐大刀（正倉院御物模造）
（明治時代／原品：奈良時代）東京国立博物館蔵
【TNM Image Archives】

国宝 黒漆平文飾剣拵（柄銀打鮫）
（平安時代）春日大社蔵

中世の刀装 ― 多様化する拵 ―

重要文化財 黒漆塗鞘太刀拵(室町時代初期)
刀剣博物館蔵

近世の刀装 ― 鞘塗の精華 ―

重要文化財 白檀塗這龍文鞘大小拵（桃山時代）
嚴島神社蔵【提供：便利堂】

黒漆塗梅花皮鮫研出鞘大小拵（江戸時代）

愛知県指定文化財 四条河原遊楽図（部分）（桃山時代）天桂院蔵

展覧会の構成

1 日本の刀装　その源流 ― 古代 ―
（1）黎明期の刀装
― 金属による加飾のはじまり ―
（2）日本刀装の祖型 ― 塗鞘の登場 ―
（3）太刀拵の誕生
― 受け継がれる姿と飾り ―
2 用と美の刀装 ― 中世 ―
（1）新たな刀装の姿
― 兵庫鎖太刀拵と糸巻太刀拵 ―
（2）装剣金工の活躍
3 千紫万紅の刀装 ― 近世 ―
（1）武家の拵
①武将と刀装 ― 桃山の気風 ―
②正式拵と太刀拵 ― 儀礼の拵 ―
（2）展開する形 ― 鞘と金具 ―
（3）鞘塗の精華
①塗りの技
②研出の美
③取り合わせの妙
（4）装剣金工の競演
①花開く装剣の技と美
― 多彩な意匠と技法 ―
②後藤家の伝統 ― 家彫の格式 ―
③江戸金工の雄
― 町彫の祖と奈良三作 ―
④町彫の広まり
（5）刀装の匠たち
（6）刀を飾る技と美　その継承

関連行事

①スライドトーク
■日時　10月23日（土）
14時～（40分程度）
■講師　古幡昇子（当館学芸員）
■会場　当館講堂
■参加費　無料
■定員　35名
（先着順、受付13時30分～）

②特別展記念対談
「語り尽くす！大名家の拵と井伊家伝来刀装」
■日時　11月6日（土）
14時～15時30分
■講師　伊東哲夫氏（文化庁文化財第一課 文化財調査官）、古幡昇子（当館学芸員）
■会場　当館講堂
■受講料　500円
■定員　35名
（応募多数の場合は抽選）
■申込方法
往復はがき往信の裏面に住所・氏名・電話番号を、復信の宛名面に住所・氏名を明記の上、「特別展記念対談」係までお申し込みください（お1人様1通）。博物館ホームページからも申し込みできます。
■申込期間
10月1日（木）～22日（金）
＊必着

③講演会
「日本の刀装 その豊かなる装飾」
■日時　11月13日（土）
14時～15時30分
■講師　古幡昇子（当館学芸員）
■会場　当館講堂
■資料代
100円
■定員　35名
（先着順、受付13時30分～）

真鍮地張果老図透鍔　銘 安親
（江戸時代前期～中期）刀剣博物館蔵

注目！

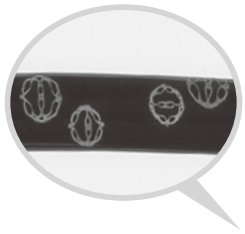
井伊家伝来の拵 ― 多彩な鞘塗 ―

彦根城博物館は、一二〇件にのぼる彦根藩井伊家伝来の拵および刀装具を所蔵しています。井伊家伝来の拵には、登城用の正式拵や儀仗用の太刀拵など、大名が公的な場で用いるもののほか、多種多様に加飾された拵が数多く含まれており、質量ともに充実した近世の拵が一群で伝存している例としては全国的にも稀少です。

井伊家伝来の拵が持つ最大の特徴は、鞘に施された装飾の種類の豊富さです。江戸時代、鞘の装飾は漆塗が主流でしたが、単に漆を塗って仕上げるだけではなく、表面に敢えて凹凸をつけて文様を表したり、植物の樹皮や実、動物の角、裂などさまざまな素材を組み合わせた変わり塗が多く用いられました。井伊家の場合、この変わり塗鞘のバリエーションが実に多彩であり、二つ以上の変わり塗の技法を組み合わせた鞘や、漆と組み合わせる素材に特異なものを使用した例が特筆されます。中でも素材として胡桃の実や長く削いだ象牙、熨斗鮑を取り入れた鞘塗は、管見の限りでは類例を見たことがありません。

また、それぞれの漆塗が極めて丁寧かつ繊細に仕上げられていることも見逃せません。磨き上げられたかのような艶と潤みを兼ね備えた蝋色塗や溜塗の他、漆を非常に薄くかつ均一に塗る摺漆などからは、皮革の細かな皺や裂の織り文様など、素材の質感を活かした意外性のある表現を可能とする、極めて高度な鞘塗の技がうかがえます。

こうした魅力溢れる井伊家伝来の数々を、特別展「日本の刀装―刀を飾る技と美―」でご覧いただけます。その卓越した漆の技に是非ご注目ください。



黒漆塗胡桃嵌鞘大小拵

テーマ展　展示室1

8/20（金）～9/15（水）

※9／1は休館

茶道具の"い・ろ・は"

茶道具は、抹茶を点てて飲むための点前道具や、掛物や花生などの飾り道具、碗や酒器などの懐石道具から成り、実に多様です。これらは、長い歴史の中で、形や質感、素材などのあらゆる面において工夫が凝らされ、道具としての機能性はもちろん、茶人たちの求めに応じた種々の造形美が追求されてきました。

本展では、多岐にわたる茶道具のそれぞれの用途や造形的な魅力を分かりやすくご紹介します。

宮王肩衝茶入

青磁刻花牡丹文花生

◉スライドトーク◉

■日　時　8月21日（土）14時～（30分程度）
■講　師　奥田 晶子（当館学芸員）
■会　場　当館講堂
■参加費　無料
■定　員　35名（先着順）

企画展　展示室1・2

9/18（土）～10/18（月）

奇才の絵師 張月樵

―彦根～京～名古屋への道―

張月樵（一七六五～一八三二）は、近江国彦根城下に生まれた絵師です。近隣の坂田郡醒井村出身で京で活躍した市川君圭（一七三六～一八〇三）に画を学んだ後京に出て、四条派の松村月渓（呉春、一七五二～一八一一）の門に入り、腕を磨きました。

ある年月樵は、京を発って名古屋に入り、当地の南画家、山田宮常（一七四七～九三）の画才を慕い、兄事したと言われています。宮常は、京に遊学し、最新の中国画やその影響を受けた各流派の画風を幅広く学び、郷里名古屋に戻っていました。

月樵の画風もまた、円山四条派の枠を超え、誇張や歪曲、単純化など、奇怪で癖の強い表現が特徴です。同じく円山四条派の長沢芦雪（一七五四～九九）の画からも少なからぬ影響を受けたとも見られています。一見奔放に描いているようで、絶妙なるバランス感覚でもって全体に破綻を感じさせないところが月樵画の妙と言えるでしょう。

月樵は、俳書をはじめとする版本の挿絵も手がけています。画集も出版されるなど、広く知られた月樵は、尾張徳川家の命を受けて襖絵などを描き、御用人支配となって帯刀を許されたと伝えられています。

本展は、実力派の絵師として活躍していながら、ほとんど知られなくなった張月樵の生涯と作品を紹介するものです。

花鳥図　徳川美術館所蔵
©徳川美術館イメージアーカイブ／DNPartcom

大黒画賛（部分）個人蔵

◉スライドトーク◉

■日　時　9月18日（土）14時～（30分程度）
■講　師　髙木 文恵（当館学芸員）
■会　場　当館講堂
■参加費　無料
■定　員　35名（先着順）
＊関連講演会を開催します。（6頁参照）

テーマ展　展示室1

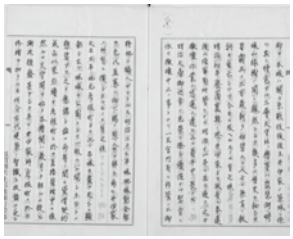
11/27（土）～12/24（金）

※12／8は休館

井伊家近代文書からみる彦根城

城は江戸時代まで軍事・政治的な拠点として重要な役割を持ち、大名やその一族、家臣、出入りの町人などしか入ることができませんでした。近代に入ると、城はその役割を終え、人びとの楽しむ公園となるなど、江戸時代とは異なる役割を持ちました。

本展では、明治以降の彦根城の様々な利用例から、彦根城が近代を歩んだ歴史を紹介します。



彦根城国宝指定ノ義ニ付申請案

◉スライドトーク◉

■日　時　11月27日（土）14時～（30分程度）
■講　師　蔭山兼治（当館学芸員）
■会　場　当館講堂
■参加費　無料
■定　員　35名（先着順）
＊関連講座を開催します。（6頁参照）

研究余録

金亀玉鶴

張月樵の名古屋行きと彦根での認知度

張月樵（一七六五～一八三一）。彦根出身で、地元では市川君圭から学び、京に上って松村月渓（呉春）門で研鑽を積み、後に名古屋に移り、当地の代表的な絵師のひとりとなった絵師です。

月樵はなぜ名古屋に向かったのでしょう。残念なことに、彼の事績をたどるには同時代史料が乏しく、後世の史料に頼らざるを得ません。田部井竹香著『古今中京画壇』（一九一一）では、長沢芦雪と東国遊歴を企てて京を発ち、美濃で袂を分かって独り名古屋入りしたとあります。これが史実か、月樵の画が芦雪画に通じるところがあることから考えられた創作かは検証の余地がありますが、当時、京の絵師が地方の寺院や富商・富農層等に招かれ、画を求められることも珍しくありませんでした。いずれにせよ、月樵の名古屋行きは、単なる物見遊山ではなかったと思われます。

ただ、これが何歳のことかは明らかではありません。月樵が最終的に落ち着いた名古屋の前津についてまとめた山田秋衛著『前津旧事誌』（一九三五）では、君圭に師事して学び、長じた後、月渓のもとで七年学んで技が大いに進んだ、とあります。長じるという語を仮に成人した十五歳頃ととると、二十二歳頃まで月渓門下として学んでいたということなります。『前津旧事誌』では、月樵は、名古屋萬松寺の住僧珍牛に宛てた紹介状を携えていたとあります。想像を逞しくすると、紹介状の差し出し元は、あるいは月渓かも知れません。

文化十四年（一八一七）刊行の月樵の画集『不形画藪』の序文には、「三十余年前山人（月樵のこと）自京師来住尾張」とあり、二十歳前後で名古屋入りしていたことは確実です。長く仮住まいをしていることから、恐らく当初は長年の滞在を意識していなかったと思われます。

ここで一つの疑問が頭をもたげます。京の文化の影響が圧倒的に大きい彦根において、中京圏での月樵の活躍ぶりは聞こえてきたのでしょうか。そのヒントとなるような資料がいくつか確認できます。

蔡文姫帰漢図（部分）　張月樵筆

ひとつは、「蔡文姫帰漢図」という巻物。中国故事に取材したもので、中国画を直接手本としたような画風で描かれたものです。巻末の跋文は彦根藩儒の龍玉渕（一七五一～一八二二）の筆で、次のように記されています。

「蔡文姫帰漢図者張月樵之画也、本藩太夫菅君嘗好丹青之技、饗使月樵画此図矣（後略）。」

彦根藩太夫菅君とは、菅原を称した藩士家、吉用家の当主と考えられます。玉渕の没年が月樵のそれより早いことから、月樵の存命中の文面となりますが、その書きぶりから、所蔵者であったであろう吉用某は既に亡く、制作されてからしばらく年月が経っているようです。月樵についての説明的な文言はなく、彼についての共通理解があった可能性が指摘できます。

また、その大部分が当主とその一族の蔵書が占める彦根藩井伊家伝来典籍の中に、月樵が挿絵を手がけた俳書が含まれています。寛政十年（一七九八）刊の『続姑射文庫』と文政元年（一八一八）刊の『新姑射文庫』の二件です。月樵を意識しての収集と思われるのが、これらに先行して刊行された、別の絵師が挿絵を手がけた『姑射文庫』（一七八六刊）は伝来していないことです。刊行後すぐの入手かは分かりませんが、『新姑射文庫』は、井伊家十二代の直亮（一七九四～一八五〇）の蔵書印が捺されており、当主の収集本であることは確実です。

（髙木文恵）

彦根藩資料調査研究会

「殿様の日常生活」に迫る

彦根藩井伊家の当主（殿様）は、日々何をして、どのような生活を営んでいたのでしょうか。これまで彦根城博物館が行ってきた、「武家の生活と教養」や「武家の儀礼」などをテーマとした研究の成果から部分的にその様子をうかがうことはできるものの、日常生活全体を把握するには至っていません。これは他の多くの藩においても同様で、殿様の生活実態の把握は、日本近世史の研究課題のひとつとなっています。

そこで当館では、令和三年度から七年度にかけて、「殿様の日常生活」をテーマとした彦根藩資料調査研究会を組織します。当主の側近である側役が当主の行動を記録した「側役日記」の分析を中心に、日々の生活を具体的に明らかにすることが目的です。例えば、一日のスケジュール、仕事や外出の際の様子、食事、趣味、交遊関係といった研究の成果は、今後、展覧会や公開研究会などで報告していく予定です。ご期待ください！

側役日記

スケジュール 9月～12月

9月

- 1 水 休館
- 11 土 教室 古文書のみかた②
- 18 土 スライドトーク 奇才の絵師 張月樵
- 19 日 能 第54回彦根城能 お能の国のクラシック
- 25 土 教室 古文書のみかた③

テーマ展：茶道具の“い・ろ・は” 8/20～9/15

企画展：奇才の絵師 張月樵 ―彦根～京～名古屋への道― 9/18～10/18

常設展示 “ほんもの”との出会い

9/16・17 展示替により一部休室

10月

- 2 土 講演会 「張月樵～謎の生涯～」
- 3 日 教室 わくわく体験スクール
- 9 土 教室 古文書のみかた④
- 16 土 教室 古文書のみかた⑤
- 19 火 休館
- 23 土 スライドトーク 日本の刀装
- 30 土 教室 古文書のみかた⑥

特別展：日本の刀装 ―刀を飾る技と美― 10/23～11/23

10/20～22 展示替により一部休室

11月

- 6 土 記念対談 「語り尽くす！大名家の拵と井伊家伝来刀装」
- 13 土 講演会 「日本の刀装 その豊かなる装飾」
- 26 金 休館
- 27 土 スライドトーク 井伊家近代文書からみる彦根城

テーマ展：井伊家近代文書からみる彦根城 11/27～12/24

11/24・25 展示替により一部休室

12月

- 8 水 休館
- 11 土 講座 「彦根城と近代」
- 25 土～31 金 休館

＊「古文書のみかた」は事前申込制です。

募集・催し

◉わくわく体験スクール「茶道を楽しもう」◉

日本の伝統文化である茶道について学び、昔の藩主の住まいでお茶の体験を行います。

■日時　10月3日（日）
1～3年生：13時30分～15時30分
4～6年生：10時～12時

■会場　当館講堂、木造棟

■講師　外海和子先生（表千家茶道講師）

■参加費　500円（保険料・資料・お茶・お菓子代）

■定員　1～3年生、4～5年生：各15名（応募者多数の場合は抽選）

■対象　彦根市、米原市、愛荘町、甲良町、多賀町、豊郷町に在住もしくは在学する小学生

■申込方法　①②いずれかで申込み。
①各小学校に配布するチラシに印刷した申込用紙に必要事項を記入し、博物館に持参もしくは郵送
②博物館ホームページから申込フォームにて応募

■申込期間
9月1日（水）～14日（火）
＊必着

◉講座・講演会◉

■日時・演題・講師・内容

①10月2日（土）14時～15時30分
企画展「奇才の絵師 張月樵（ちょうげつしょう）」関連講演会
「張月樵～謎の生涯～」
高木文恵（当館学芸員）
彦根出身で京に出た後に名古屋でブレイクした絵師、張月樵（一七六五～一八三一）。謎に包まれた彼の生涯を、のこされた作品や文献などから、時代背景も踏まえて辿っていきます。

百鳥図（部分）懐古堂コレクション KAIKODO COLLECTION

②12月11日（土）
14時～15時30分
テーマ展「井伊家近代文書からみる彦根城」関連講座
「彦根城と近代」　陸山兼治（当館学芸員）
井伊家近代文書を中心に、古文書に記録された明治時代以降の彦根城の様々な利用例を紹介し、近代社会において城が果たした役割を考えます。

彦根城山行啓御通路図

■会場　当館講堂

■定員　各35名

■資料代　各100円（但し、彦根市内在住の中学生以下は無料）

■受付　当日受付（先着順、受付13時30分～）

現在、開催を予定している展示・講座等は、新型コロナウイルス感染症の拡大の状況により、中止となる場合があります。最新の情報は、彦根市や当館のホームページ、フェイスブック等でご確認ください。

世界遺産
彦根城を世界遺産に
彦根城はユネスコの世界遺産暫定リストに登録されており、世界遺産をめざしています。

編集・発行
彦根城博物館
〒522-0061　滋賀県彦根市金亀町１番１号
TEL 0749(22)6100　FAX 0749(22)6520
https://hikone-castle-museum.jp/
この印刷物は6000部作成し、印刷単価は約12円です。